

また異常妊娠の胎盤では正常妊娠胎盤に比し低値をしめした。

⑧健常婦人における V.B₁₂ 負荷試験成績は30%非経口投與では24時間中の尿中排泄量は10%内外であった。また正常妊婦(10カ月)及び子宮癌末期患者では比較的低位を示した。

⑨深部線照射時における血清 V.B₁₂ 値の変動様相は照射量の増加に伴い漸増する傾向を認めた。

II) 葉酸

①健常性成熟婦人(19~32歳)31例の血清葉酸量の平均値は24.8mg/cc であった。

②正常妊婦の血清葉酸量は妊娠月数の累加に伴い漸減し、妊娠10カ月正常妊婦血清葉酸量は14.3mg/cc であった。

89. Ascorbin 酸の基礎的並びに産婦人科的實驗研究

(鹿兒島大) 安田 義重

現今 Vitamin C (VC) とホルモンとの関係はいろいろと論議されている。余は後者と緊密なる関係をもつ吾人の域において、VC の重要性を信じ、まず血清中の VC 定量法を検討し、資料の節約や定量法の簡素化を圖り、しかも正確なる成績をうる方法の案出に成功した。ついでわが領域における血清中 VC の状態を追求し、併せて家兎についてもその検討を試みた成績を報告する。

従来血清中の VC は極めて微量、かつ不安定で容易に酸化型 VC (DHA) さらに不可逆的に 2, 3 Diketo-Gulonic Acid となり、分解するためその定量に幾多の不便があつた。余は Tillmans の 2,6-Dichlorophenol-Indophenol (Indophenol) 及び Roe, Keuther の 2,4-Dinitrophenylhydrazin (DNP) を使用する方法をそれぞれ検討し、還元型 VC (AA) 引續き總 VC (TVC) を測定する方法を考案した。

まず Indophenol VC 定量法と E. Pijanowski の硫化ソーダ應用法を併用して、血清中の AA 及び DHA 分別定量法を検討した。すなわち血清 2 cc に 6% メタリン酸 3 cc を加え、その除蛋白液に 5 mg% Indophenol を加えて AA を定量し、その AA 定量済み液 4 cc に 1.5 N 鹽酸 1 cc, 1 M 硫化ソーダ 0.7 cc を加え、さらに 1 M 鹽化第 2 水銀 1 cc, 蒸留水 1.3 cc を注加して、これを濾過し、該液に同量の 2.5 mg% Indophenol を加えて TVC を定量した。かかる操作によつて従來の VC 定量法の確實な簡便化を圖りえた。

つぎに DNP 法に検討を加え、Indophenol 法によつ

て AA を定量し、その定量済み液に DNP 法を併用した。AA 定量済み液 5 cc に 3% 鹽化第 1 錫 (または 6% チオ尿素) 5 cc を加え、該液 4 cc に 2% DNP 液 1 cc を加え 37°C 3 時間放置後、光電比色計を用いて TVC 量を比色定量した。かくして定量法の簡易化、試料の節約を圖り、しかも正確な測定値がえられた。

上述の定量法を應用して正常婦人の月經前後における血清中の VC 及び妊婦並びに閉經婦人のそれを定量した。月經前及び妊婦にあつては血清中 DHA の減少を認め、また家兎實驗においても妊孕家兎に VC 減少を認め、とくに VC 缺乏飼育群において非妊對照に比べて妊娠家兎では DHA の著減を認めたことは甚だ興味のある事實と思う。

90. 卵巢移植に関する研究

(岡山大) *八木日出雄, 永井又太郎,

穂崎年邦, 渡邊一郎, 東進, 關場 香

卵巢自家移植については、わが國においては 1928 年大野氏以來北大教室より一連の研究發表がありその先驅をなしている。今回ゆかりの地札幌の學會で、これに関するわが教室業績を報告する機会をうることを喜ぶものである。

卵巢移植はその移植した卵巢が機能を営む限り自然の内分泌バランスを保持せしめ、個々のホルモン劑投與に比し生物學的意義が大きく治療効果もまた大きい。わが教室における應用は主として子宮頸癌の手術患者で年齢 50 歳以下の比較的若い婦人について、術後レントゲン放射による卵巢の破壊をさけるためこれを剔出し、腹直筋内に隣りに近く移植したものであるが、その後他疾患への應用及び他家卵巢移植に進みつゝある。

移植卵巢機能の判定には近時ホルモン學の進歩に伴つて發達した各種の測定法を用いた。その點舊來のものより一段と正確になつて來た。例えば尿中エストロゲン定量、腔脂膏検査、基礎體温、基礎新陳代謝などである。かつこれらを同一患者について移植後長期に亙つて連續繰返して検査することは殊に重要である。かかる用意をもつて、

〔I〕自家移植については頸癌手術例 I 期, II 期のものについて、まず卵巢に癌轉移のないことを組織的に検査、かかる移植患者の 5 年治癒率が對照と差のないこと及び移植部位に癌轉移などの起らなかつたことを確認し、これら移植例(1938~1956年に 946例)の臨牀経過ごとくに所謂脱落症狀が對照に比し軽度で術後 2 年迄に強い症狀の出現率は有意に少いこと並びに基礎代謝の面から移植群は早期に内分泌系の安定状態に入つてゐることを